

地域診断とソーシャル・キャピタル(2) 保健師活動の質的調査

村田陽平(武庫川女子大学)・埴淵知哉(日本福祉大学)・近藤克則(日本福祉大学)

【目的】今日の日本社会では、地域のさまざまな結びつきが希薄になる中、社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)という概念が重視されつつある。社会関係資本とは、人々の関係性の中で生じる社会的な資源の有用性に焦点をあて、地域住民のつながりや助け合いなどに注目するものである。これに対して、保健師は、「地域診断・地区診断」等の活動にみられるように、地域に積極的に出ること、住民の健康を考える際の地域のなかの繋がりを重視してきたといえる。そこで、本研究では、A県B半島の保健師の活動に注目して、日常業務の中で、保健師がどのように地域と関わり、地域診断を実施しているのかを明らかにすることで、地域のソーシャル・キャピタル向上における保健師がなし得る可能性を検討する。

【方法】A県B半島の保健センター(10箇所)、およびB半島を管轄するA県保健所(2箇所)で活動する保健師に対して、半構造化インタビュー調査を実施した。このような面接式調査の長所は量的調査ではあらわれにくい対象者の意識を可視化できる点にある。主に4つの基礎的な質問項目(職務の概要/具体的な活動地域/地域診断/今後の保健活動の展開)を設定の上、2006年10月から2007年2月にかけて、各保健センター/保健所の保健師(1名~4名)に対して約1時間から3時間にわたる綿密な聞き取りを実施した。なお録音した対象者の発話データは、KJ法により分類した。

【結果】全体の結果として、地域診断を積極的・体系的に実施している保健師は皆無であった。その理由は、1)保健師業務の変化(デスクワーク業務の増大等)2)地域診断への苦手意識(保健師実習の変化等)3)保健師間の地域情報伝承の困難性(ベテラン層の退職等)などである。ただし、日常の家庭訪問の中で、保健師ならではの多様な工夫による質的情報の獲得によって無意識的ともいえる地域診断を実施しており、地域を総体的に把握している。また地域住民の健康増進において会話や挨拶など全人的なコミュニケーションの重要性を認識しており、結果的に地域の関係性を結ぶ役割を果たしている。

【考察】本調査から、福祉医療の専門的分化のなか、地域の関係性を結び、ソーシャル・キャピタル向上に貢献し得る保健師の「総合力」の可能性が示唆されたといえる。そのためには、量的情報のみならず、質的情報の重要性の再認識し、現場で使いやすい地域診断ツールの開発も行うべきであろう。また、保健師間の地域の知識伝承という観点からも、より働きやすい保健師の労働環境づくり(男女共同参画社会の実現等)が求められる。

本研究は、日本福祉大学21世紀COEプログラム研究の助成を受け実施された。